

## 薬剤師業務研修に参加して

埼玉病院 木村 有揮

「薬剤師業務研修」は、令和6年9月4日に開催された、中堅薬剤師や医療安全を担当している薬剤師を対象として、医薬品安全管理責任者の業務および医薬品副作用被害救済制度の仕組みを学ぶことを目的とした研修です。本研修の背景には、医療事故の発生を完全に防ぐ事は困難であり、医薬品安全管理に関する業務は重要であることは理解されているが、一方でその教育や意識については十分ではないことの現状があります。しかし、医療事故のなかで医薬品が関わる頻度は少なくありません。その専門家である薬剤師が医薬品安全管理責任者としてだけでなく医療安全を学ぶ必要性を感じ研修に参加しました。今回、研修内容の一端ではありますが紹介させていただきます。

●北里大学病院 医療の質・安全推進室副室長  
医療安全管理者 荒井有美先生

「ナレッジマネジメントによる患者安全の取り組み インシデント報告から学びを続ける」

医療事故の発生時には、その原因を特定することで、対策を検討し再発防止に繋げることが従来の対応です。本講義では、医療安全におけるレジリエンス工学として、従来から行われているSafety-I（悪い結果をもたらす原因をすべて除去すれば安全が達成されると考え方）ではなく、Safety-II（医療事故が発生せずに業務が実施できている要因を増大させる考え方）の重要性について講義を頂きました。いわゆる、失敗例を減ら

すことではなく成功例を増やすことに着目した医療安全の考え方です。Safety-IIを実践するためには、医療事故が発生した業務が平常時にはどのようにインシデントを回避しているのかを分析することから始まります。そこには、通常業務には、エラーの発生要因があるにも関わらず、個人の経験則に基づいた技能や知識により、結果的にはエラーが修正もしくは回避されている無形の要素があります。その要素を明確化や共有化を図り、業務の効率化や組織全体の知識強化を目指すことが大切であると学びました。また、Safety-IIはSafety-Iを否定するものではありません。分析する方向性は異なるものの、結果的には、例えば「病棟ではインスリンのバイアルを単位数とmLの間違いを防止するために専用シリンジと一緒に保管する」など、対応策が同一になる事もあります。ただし、結論に至るまでに多職種の視点で問題を解決することが重要です。医療の提供は多職種の協働作業により実践されますが、一方で、それぞれの立場で認識や常識は驚くほど異なります。さらに、職種間の業務環境の違いにより、意見の不一致などの対立が起こる認識も必要となります。そのため、「誰が」正しいのではなく、患者さんにとって「何が」正しいかを検討する意識を常に共有することが、医療事故の対策を検討する際には最も重要であると学ぶことができました。

本研修を受講し、医療安全のみならず、私の主業務である抗菌薬適正使用支援チームの専従者としても取り入れるべき要素が多く、今後の業務に活かしていきたいと考えております。

最後になりましたが、このような研修会を開催頂きました国立病院機構関東信越グループ並びに関信地区国立病院薬剤師会の皆様に厚く御礼申し上げます。